[研究ノート]

留学生の専門学科への適切な接続を目指す実践
～政治経済学科の留学生を対象として～

松村　憲

1．はじめに

本学が留学生に対する「日本語予備課程」を創設して10年が経過した[1)]。その間、様々な工夫を重ねながら継続されてきたが、2017年度をもって廃止され、新たに2018年度春学期より、日本語科目として、「アカデミックジャパニーズ（政治経済）」、「アカデミックジャパニーズ（現代社会）」が、それに対応する形でより専門的内容の「政治経済」（以下「政経」）及び「現代社会」（以下「現社」）が開講した。これらの科目は、留学生が所属学科に応じて履修することになっている。この科目の新設は、留学生に対する日本語教育と本学における一般教養科目、専門科目との円滑な接続を期すためのものである。

こうした科目が設置された背景には、日本語教育と大学の専門講義との格差に戸惑う留学生が少なからずみられたからである。日本語会話をある程度習得できても、日本独自の文化への対応や、留学生の出身国における教育課程の差（たとえば高等学校段階までに該当する学習内容が設定されていないなど）がみられ、大学においてそれまでの学習を生かしながら学んでいくための障害となっていた。

また、一般教養科目、専門科目の講義担当者からも、留学生と一般の学生との間に日本語の理解の程度とは別に、留学生がそれまでに学んできたことや母国の文化・伝統を背景とした違いがあり、指導に困難が伴うという指摘があった。専門科目の取組としては、本来ならば社会科学的にその学習内容について、ある一定程度の共通理解にたち、自らの考えを述べたり、学生同士の意見交換や討論等をしたりして、理解を深化発展させていくことが求められるが、その段階に到達できない留学生が存在する状態となっていると考えられる。そこで、図１に示されるような取組を行って、円滑な接続を目指すこととした。

本稿では本学政治経済学科の留学生を対象とした「政経」を中心とした取組を述べる。

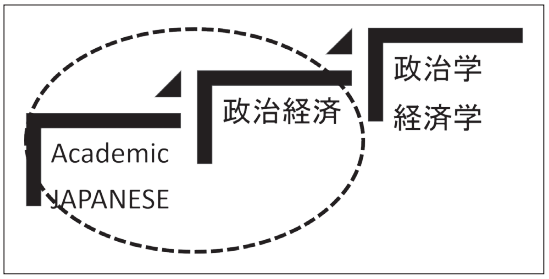


図１　接続の構想

2．具体的な取組１（「接続」を図る取組）

本取組の中核をなす特徴は、円滑な接続を図るために「日本語教育」と「政治経済」とをそれぞれ個別の講義として実施するのではなく、「日本語教育」「政治経済」を役割分担し、それを時間的内容的に接続させた点にある。

2.1. 日本語教育と「政経」の学習内容をそろえる

はじめに担当者間でシラバスを検討し、「政経」の講義の前に必ず該当内容の日本語を指導する授業（アカデミックジャパニーズ）を計画した。留学生にとっては、専門的な日本語の“意味”をこの授業で予習することになる。それを「政経」の講義で“内容”を正しく理解することにつなげようと意図した。

実際には、前時に次時の学習内容にかかるポイントとなる言葉の意味調べを中心とした課題を出して事前学習をさせ、アカデミックジャパニーズの日本語学習でその意味を正確につかませた。その後の「政経」において、内容を学ぶという流れとした。

留学生に対しては､学期当初にオリエンテーションを行って、アカデミックジャパニーズと「政経」の連携の方法とこの取組の目的を説明した。時間割の設定も、アカデミックジャパニーズと「政経」が連続しているので、学生のスムーズな出席を得ることができた。

2.2. 毎時間のノート点検を実施する

受講する留学生全員にノートを与え、「政経」の講義後に提出させた。このノートをアカデミックジャパニーズ担当者が次時までに点検し、学生に返却して「政経」に持参させるというサイクルを作った。

これは個別指導に生かすことが目的ではあるが、それだけでなく学習内容と留学生の理解の程度の確認や詳細な学習内容を担当者間で確認することにもつながる。留学生の理解度や取組の姿勢を把握して個別指導に生かし、留学生本人に繰り返し適切なフィードバックをすることができた。毎時間の添削により、細やかな指導が可能になった。

3．具体的な取組２（「学習内容」を深める取組）

一般の学生と留学生との間には既習事項に大きな差がある。また、留学生の中でも、その母国の違いによって差が見られる。留学生の母国の教育課程が日本のそれと同じではないから当然ではあるが、その差が大きすぎる場合は、自助努力だけでは克服が難しいものとなりかねない。留学生への個別の聞き取りによれば、政治経済分野だけでなく、歴史分野（世界史)、特に近現代史の扱いに大きな違いがあることがわかった[2)]。

たとえば、「景気変動」を扱う際、世界恐慌とその後の世界を事前に理解していれば、不景気の態様や要因になることが一定程度理解されているという前提で授業が展開されるのが一般的であろう。しかし、中国やベトナムからの留学生の場合、東洋史中心の理解であり、欧米の歴史は日本の場合と比べて、扱いが少ない傾向が見られ、基本から学び直すことが必要になったという現実があった。

このことは、留学生が政治経済を学ぶ上でその土台が大きく違っていることを意味し、それまでの学習内容が理解できているかどうか以上の大きな障害となっていると考えられた。

そこで、本取組では、基本事項を確実に理解させることが必要だと考え、学習内容は中学校及び高等学校の教育課程を概観しながら検討し、専門教養の内容に接続できるよう配慮した計画を立案して実践した。

その際、学習する内容は主として高等学校の教育課程に拠ったが、テキストは留学生の読解力に配慮して中学校の検定教科書を用いた[3)]。

実際の授業においては、理解を深めるという視点から、画像や図表、あるいは動画等を積極的に活用し、イメージを具体的にもてるように工夫するとともに、留学生の母国に関わる話題を意図的に取り入れるなどして、留学生自身の興味関心を喚起、持続できるようにした。

また、日本語による接続を図るという観点から、講義一辺倒ではなく、アクティブラーニングの手法を取り入れて、作業や討論などを積極的に行うこととし、日本語のスキルを高めることにも配慮して取り組んだ。

3.1.「課題シート」の取組～スキルアップのための「書く」「表現する」活動～

留学生が日本の大学における「政治学」や「経済学」などの専門科目の内容に円滑に接続するためには、単に日常会話ができるというだけでなく、専門用語を含む日本語を理解したり（「聞く」「読む」)、産出したり（「話す」「書く」）が求められる。

政治経済の分野で用いられる言葉を適切に理解し、その言葉を用いて説明したり、考えを述べたりできなくてはならない。

そこで、毎時間のテーマに基づいた「課題」を設定し、日本語で表現する時間を繰り返し設定した（表１)。

この「課題シート」は、その授業内で時間を設けて書かせ、学習内容が理解できているかを確かめるとともに、適切な言葉を正確に使って「書く」活動を求めた。授業終了後に回収し、添削した上で、次時に全体及び個人にそれぞれフィードバックした。

この取組で繰り返し一定程度の量の「文章」を

表１　講義の内容と「課題」の例

授業回	主な内容	課題
13	流通	流通の合理化のメリットとデメリットを説明しなさい。
14	企業の大規模化	「生産」や「競争」では大企業が中小企業より有利であるが、中小企業の存在の意義は何か。
17	市場経済のしくみ	大雪になると野菜の価格が高騰するのはなぜか。「需要」と「供給」という言葉を使って説明しなさい。グラフを用いて説明してもよい。
19	景気変動	好景気から後退するとき、不景気から回復するとき、そこで何が起こっているか。景気が変動することを説明しなさい。
21	租税と公債	日本の財政では公債依存度が高いといわれている。今後はどうするのがよいと考えるか。 Ａ：公債の発行をやめて増税を行って歳入をまかなう。 Ｂ：公債の発行をやめて歳出削減を行う。 Ｃ：このまま公債の発行を続ける。
24	公害	被害が生じる前の早い段階で公害防止対策を講じることは、経済的にも合理的であることを説明しなさい。
25	外国為替相場	為替相場の値動きについて、次の場合は「円高」「円安」どちらにシフトすると考えられるか、説明しなさい。 Ａ：日本からの輸出が増えた。 Ｂ：日本から海外への投資が増えた。
26	経済成長	日本では現在世界第３位のGDPを維持していますが、内閣府調査の「生活満足度」は、GDPの上昇とは一致していません。このことについて考察しなさい。
27	自由貿易協定	FTAとEPAについて、それぞれのメリットとデメリットを説明しなさい。

政治経済④チェックシート

番号		名前（カナで）	

1　適する言葉を答えなさい

①国会で定められた法律や予算に基づいて政策を実施することを何といいますか。

②内閣のトップの大臣で、国会によって指名されるのは、何とよばれる大臣ですか。

③上の②の大臣以外の大臣を、まとめて何とよんでいますか。

④日本の国会と内閣の関係は、何とよばれる仕組みですか。

⑤公務員は、どんな種類がありますか。一つあげてください。

2　行政改革をすすめるために、どのようなことをしたらよいと、あなたは考えますか。簡単に書いてください。

図２　「チェックシート」の例

書くことにより、会話言語だけではなく、今後の専門科目の学習に必要な語彙を獲得し、文章を書くというスキルの向上が見込まれる。

3.2.「チェックシート」の取組

毎時間の終了時には「チェックシート」を配付し、学んだ語句や講義の中で考えたことをまとめられるようにして、知識の定着を図るように心がけた（図２）。

この「チェックシート」は、授業の終末部分で扱い、授業終了時に一人一人対話をしながら点検を行った。書き終えたものについては、そのままノートに添付し、「アカデミックジャパニーズ」担当者が確認することができるようにした。

留学生にとっても、ポイントの内容が理解しやすいように意図した取組である。

そのほか、知識の定着の度合いをさらに高めるための演習や評価テスト前の学習会、留学生の主体的な参加を高めるための意見交換、教え合いの場を積極的に設定するなど、アクティブラーニングの要素を多く取り入れるように心がけた。

４．成果と課題

次に示す図３ ～図５は、本学で実施している「授業アンケート」の一部である。

今回の取組はこれまで前例がないものなので、従前との比較はできない。また他の授業のデータとも比較はできないが、受講した学生は、概ね満足している傾向が見て取れると考えてよいのではないか。

また、講義を繰り返してきた中の印象として「課題シート」への記入がスムーズになったり、講義内容を十分理解していると感じられる評価テストの結果（図６）が示されたりしているので、留学生の積極的な参加との相乗効果もあって、意図した方向に進むことができたと思える。

課題としては、まずこの取組を継続して、教養科目や専門科目への接続が円滑になったかどうかを検証することをあげておきたい。そのための検証方法の検討も必要であろう。

今回の実践をとおして、学生の反応や実態が明

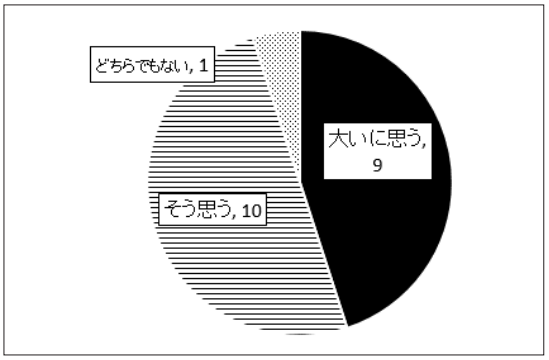


図３　Ｑ１　説明はわかりやすかったか

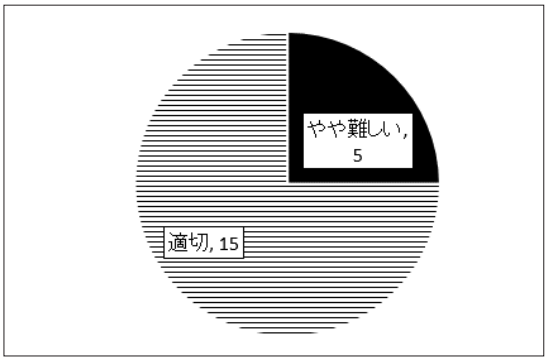


図４　Ｑ６　難易度は自分に合っていたか

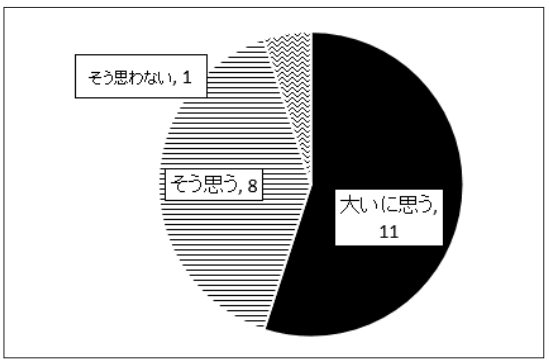


図５　Ｑ７　意欲的に取り組んだ

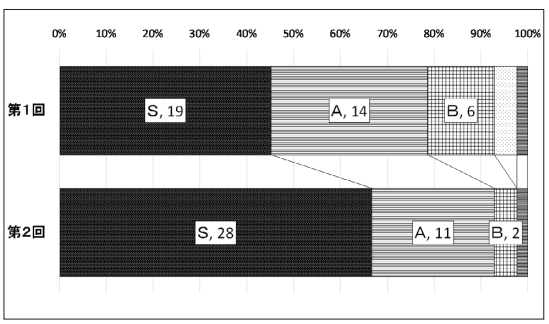


図６　評価テスト結果

らかになった部分もある。今後はより一層の効果的な取組を目指して、修正を加えながら実践を継続したい。

注

1）日本語予備過程に関する詳細は、棚橋（2013）を参照されたい。

2）中国の高校教科書の世界史では、愛国主義教育、民族精神等が強調され、英雄の業績、戦場の写真が多用され、政治的な意味を持つ言葉の使用、侵略に特化した内容となっており、歴史事件については、その影響と評価が多いという指摘がある（李秦朗・李秦朗・銭薇 2014）。

3）『新編新しい社会公民』東京書籍。

参考文献

・齊藤伸（2013）「アクティブラーニング共同研究のはじめに～大学改革セミナー報告とともに」『聖学院大学NEWSLETTER』23（1），8-11.

・棚橋明美（2013）「日本語予備課程の歩み」『聖学院大学NEWSLETTER』，23（1），2-4.

・李秦朗・李秦朗・銭薇（2014）「中国と日本の高校歴史教科書の比較」http://ch-gender.jp/wp/?page_id=3679 <2018年12月23日アクセス>.

・文部科学省（2008）中学校学習指導要領（公民分野）http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sya.htm#koumin <2018年4月4日アクセス>

・文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説（公民編）http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1282000_4.pdf <2018年4月4日アクセス>

（まつむら・けん　聖学院大学基礎総合教育部非常勤講師）